

自閉症スペクトラム児のコミュニケーション支援に関する事例研究

内 田 芳 夫

西 村 霞 (川崎市立A小学校教諭)

A Case Study of Communication support in Autism Spectrum Disorders

UCHIDA Yoshio NISHIMURA Haruka

キーワード：自閉症スペクトラム コミュニケーション インリアル

要約：本論は、自閉症スペクトラム障害のある児童に対して語用論的アプローチの一つであるインリアル・アプローチを行った。その結果、対象児において遊びの拡がりや能動的な伝達行動が見られた。また、療育者のコミュニケーション感度も高まり、子どもと大人の相互交渉過程において、子ども主導による良好な相互の関係の発達が認められた。

1. はじめに

2006年の学校教育法等の一部改正により、2007年より従来の特殊教育から特別支援教育へと転換した。特別支援教育の特徴として、障害児教育対象の拡大が挙げられる。この転換により、LD, ADHD, 高機能自閉症等の発達障害と言われる障害児も教育的指導の対象となった。発達障害の一つである広汎性発達障害 (Pervasive developmental Disorder) は、脳機能の障害に起因する社会性の障害である。広汎性発達障害の代表的な障害は自閉症 (autism) であるが、「広汎性」という言葉から分かるように、自閉症の他に認知や運動等、障害が広範にわたっているレット症候群 (Rett's syndrome)、小児期崩壊性障害、アスペルガー障害等も含まれる。1943年、アメリカの児童精神科医レオ・カナー (Leo Kanner) が、他者との情緒的接触の困難という共通の特徴をもつ子どもたちを「早期幼児自閉症」として報告したのが自閉症の最初の事例 (11例) であった。また、1944年、オーストリアのハンス・アスペルガー (Hans Asperger) が独特の他者との関係性を示す子どもたちを「自閉性精神病質」として報告した。イギリスのウィング (Wing, L.) は、このカナーとアスペルガー両者の報告について、明確な境界線を引いて分類できるものではなく、連続体として存在しているとし、自閉症スペク

トラム (spectrum) という名称を提唱した。自閉症はDSM-IVでは自閉性障害の診断名で掲載され、a) 対人的相互作用と意思伝達の2領域での質的障害、および反復・常同的な行動パターン、興味、活動の限局、b) 自閉症と思われるようなこれらの症状が3歳以前から出現している、という内容の診断基準が示されている (上野・他、2006)。自閉症スペクトラム障害には、社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害とそれに伴う行動の障害の、いわゆる3つ組障害と呼ばれる障害が見られる (別府・他、2005)。本論では3つ組障害のうち、特にコミュニケーションの障害について取りあげる。自閉症児のコミュニケーションの一般的特徴として、発話の遅れや反響言語 (エコラリア) が見られ、また、伝達意図の誤解や会話場面の無視、話し手・聞き手関係の混乱等の語用能力の障害、さらに、他者の考えや気持ちを受け止めながら行動することが困難な「心の理論」障害等が認められる。このようなコミュニケーションの障害は、人との相互作用を通じて、コミュニケーションの方法やルールについて学ぶことが困難であることと考えられる。そこで、自閉症児に対する支援として人との相互作用を介したコミュニケーション支援が重要な課題の一つとなる。

言語・コミュニケーション発達に障害のある

子どもへの支援として、認知・言語的アプローチや補助代替アプローチ、行動療法等があるが、本研究では、語用論的アプローチの一つであるインリアル (Inter Reactive Learning and Communicationの略・INREAL) (竹田・里見、1994) による療育を行う。

インリアルは、1974年、コロラド大学のWeiss, R博士らによって開発されたコミュニケーションを含む学習援助法である。インリアルは子どもの自発性を尊重しながら、子どもが遊びやコミュニケーションを開始する力を重視し、大人からのコミュニケーション開始を控え、子どもからの開始を待つことに反応することを基本原則とする。コミュニケーションの手段として、ことば以外の前言語的伝達手段(発声、物の受け渡し、指差し等)を使用しているか、また、表情や雰囲気的重要性に着目し、子どもが潜在的に有している手段を用いてコミュニケーションが可能になることをアプローチの目標としている。

II. 目的

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders : 以下ASD) のある児童に対する支援の中で、特にコミュニケーションに焦点を当てアプローチを行う。本研究では、対象児が自発的に他者と関わることを楽しみ、コミュニケーション能力を豊かにできるように支援することによって、遊びの拡がりや相互交渉過程が促進されるかどうかを吟味し、併せて療育者 (Therapist : 以下Th) にコミュニケーション感度の変容が見られるのかを検討することを目的とする。

III. 方法

1. 対象児 (M児・女児) の概要

- ・療育は2010年4月 (7歳5ヶ月) から2010年12月までの9ヶ月間
- ・家族は父・母・M児・弟の4人構成
- ・生育歴：出生体重3360g、頭囲32.8cm、首のすわり3ヶ月、つかまり立ち10ヶ月、身振り1歳、一人歩き1歳2ヶ月、一語文1歳6ヶ月、なぐり描き2歳、色の識別5歳、
- ・療育歴：2歳時にK相談センターで広汎性発

達障害と診断され、2歳7ヶ月時よりH通園施設に週3回通いながら、並行してI保育園にも通う。3歳5ヶ月からK大学の療育に週1回程度、参加する。現在はH小学校特別支援学級に在籍し学習している。

- ・WISC-III (5歳9ヶ月時) の結果：言語性知能は70、動作性知能は78、全検査知能は71であった。言語性検査では、知識(10)や数唱(9)の評価点は高く、類似(1)の評価点は低い。動作性検査では、積み木模様(11)や組み合わせ(9)の評価点は高く、記号探し(1)の評価点は低い。
- ・療育開始時 (2010年4月) の様子：「こんにちは」、「さようなら」などの挨拶をすることができる。時刻を確認することが多く、それに合わせて行動を切り替える。「遊んだ後はお片づけだよ」と言語で確認しながら動作を行う。Thに話しかけたり質問したりする。

2. 分析方法

ビデオ場面全体を通して行うマクロ分析と継続的記録を取るミクロ分析を行う。具体的なインリアル・アプローチの分析として、1)遊びとコミュニケーションの変化、2)M児の伝達行動における開始・反応の変化、3)相互交渉過程の継続的变化、4)Thの感度の変化の4つの視点について行う。

IV. 結果と考察

1. 遊びとコミュニケーションの変化

17回の療育を前期 (4月～7月) と後期 (10月～12月) に分け、各期でのM児の遊びの変化及びコミュニケーションの変化を示す。

1-1. 遊びの変化

前期：M児の好きなキャラクターのおもちゃを持ってきてThにそのキャラクターの名前や遊び方などについて説明する。トランポリンで遊び、跳びながらプレイルームにある大きな鏡で自分の姿を確認することが頻繁に見られた。自分で決めたルールで遊びを展開し「5-2でわたしの勝ち」と言って勝負に勝って喜ぶ姿が見られた。ブランコを見つけると「ブランコしたい」と言う。キャッチボールは「怖い」と言って目を閉じていたが、しばらくするとThとの距離を近づけ数を

数えながらキャッチボールができるようになった。全体として、一つの遊びに固執することもなく、ボールで遊んだ後、トランポリンで跳んだりプラレールをするなど、プレイルームの遊具を大いに使って遊んでいた。なお、療育の30分間は同年齢のT児と一緒に遊ぶ環境を設定した。

後期：T児の遊んでいるプラレールと一緒に遊んだり、T児に話しかける姿が見られた。ボールプールの中で遊ぶ回数も増え、その中に埋まり隠れて「助けて」と言ってThに助けてもらう遊びが見られた。ブロックで「12階建てのビルを作る」と言ってブロックを高く積み上げる。綿を雪に見立てて雪合戦をして遊ぶ。「クリスマスごっこしたい」と言って、サンタさんの服を着た人形に、綿でひげをつけてトナカイの上のせたり、大きな袋を見つけてサンタさんのプレゼントを入れる袋作りをする。遊んだ後の片付けを行う姿も見られた。

前期には見られなかった行動として、後期でT児がプラレールで遊んでいた時にM児はしばらく眺めた後、「トンネルがない」と言って、T児の遊びを手伝い始める場面が見られた。また、M児がトランポリンに座っているとT児がトランポリンに乗り跳び始め、二人でトランポリンを跳ぶ姿が見られた。前期では、並行遊びが多かったが、後期ではお互いに他者を意識しながらの、いわゆる「三項関係」的遊びに発展していることが示唆される。

1-2 コミュニケーションの変化

前期：プレイルームに入室し、「おはようございます」と自ら挨拶する。遊びの時に、「少なく回した方が負けよ」や「10跳ばないと負けよ」など、ルールの説明をして一緒に遊ぼうとする傾向が見られた。おもちゃの木琴を使って『きらきら星』を弾いて「次は先生が弾いてみて」など、交代しながら遊ぶ場面が多く見られた。ThがT児に剣で叩かれ「痛い」と言うのと、「先生、大丈夫」と心配する。「これは、何ですか」や「今日は何時にお迎え来るの」など、M児自身がわかっていることをThに質問する場面が頻繁に見られた。毎回、時間を気にしながら行動し、自らが決めた時間に合わせて行動することが多かった。

後期：M児「先生、家に帰る時はどうやって帰る」、Th「新幹線に乗って帰るよ」、M児「おお～」、Th「とっても速いんだよ」、M児「先生怖かった怖くなかったどっち」など、疑問に思ったことを積極的に質問する。T児に対しても、「T君プリキユア見ていますか」や「夏休み楽しかった」などの質問をする。同じ質問を何度か繰り返すことも見られたが、人物に関する質問が多くなった。T児が危ない遊びをしているとThに向かって「危ない遊びはしないでください」と言い、視線はT児の方を向いていない。質問に答える時に「あのさ」から始めることが多い。さらに、M児はThに「Tくんと先生はお勉強中」と質問した後で「おしゃべりはいけません」や「静かにしてください」と言う等、自ら予想した答えをThに聞いてくることがあった。

T児がM児の持ち物に興味を抱き「見せて」と言って話しかけると「いいよ」と言って貸してあげる場面が見られた。M児からT児に質問をしたり、自分の遊びに誘ったりコミュニケーションの主導権を取ろうとする場面が多く見られた。二人による相互的なコミュニケーションも展開され始めたが、M児の一方的なコミュニケーション場面も多く観察されたので、お互いに興味を示す事物を通して、また、お互いの世界に関心を寄せるような環境づくりが課題となる。

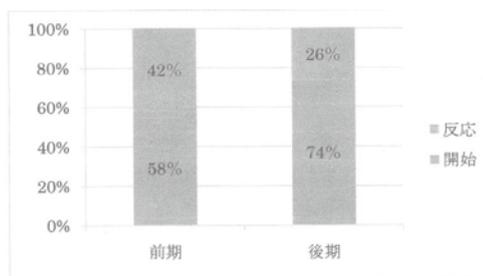


図1 伝達行動の開始と反応の割合

2. M児の伝達行動における開始・反応の変化

M児とThの二者関係における、M児の伝達行動の開始・反応の変化の割合を示した(図1参照)。

前期と後期を比較すると伝達行動の開始は、58%から74%に増加し、伝達行動の反応は、42%から26%に減少した。これらのことを踏まえると、

前期では、M児とのレポート形成のためにThからの話題提供による開始が多かったことが結果に影響したと考えられる。後期においては、M児からの開始が増加しており相互の信頼関係が築かれたことが示唆される。全体として、ThはM児に反応的にかかわることができ、一方、M児もThと積極的にコミュニケーションを図ろうとする様相が認められる。

3 相互交渉過程の継時的変化

相互作用を短パターンと長パターンに分け、Aini (Adult Initiative) 短、Aini長、Cini (Child Initiative) 短、Cini長パターンの4つの継時的変化の割合を示した(図2参照)。前期と後期を比較するとAini短、Cini短が共に減少し、Cini長が増加している。Aini長は、ほとんど変化が見られなかった。短パターンの減少は、言語コミュニケーションの成立を物語る現象であり、その背景には相互に他者意識や他者理解が培われてきたことが示唆される。また、子ども主導による長パターン(Cini長)が増加しており、その背景には、相互の信頼関係の構築や言語心理学的技法の有効活用が関与しており、総じて、相互の関係の発達が認められた。

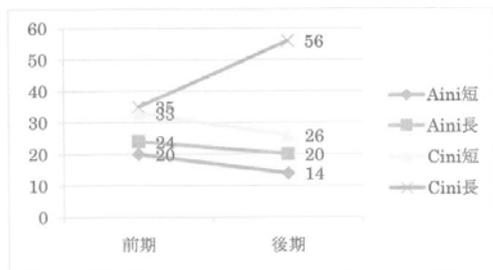


図2 相互作用ユニット(短・長)とini(A・C)の割合の変化

4. Thの感度の変化

Thの感度の変化を子どもとのかかわり方の変化として捉える。

前期：インリアルの基本姿勢であるSOULを守りながら反応的にかかわることが少なかった。両者に沈黙が生じると、Thから会話を始めることが多く、M児の行動を静かに見守るSilenceが見られない。M児は同じ質問を繰り返すことが多かったが、それに対す

る応答が曖昧であったり、M児の行動を模倣してコミュニケーションの契機をつかもうとする姿勢が少なかった。さらに、間違った言葉の使用に対して正しく言い直してフィードバックするリフレクティングやM児の言葉を意味的・文法的に広げて返すエキスパンション等の言語心理学的技法を意識して使用する場面が少なかった。M児の言葉をまねるモニタリングやThの行動や気持ちを言語化するセルフ・トークは初回から見られた。

後期：M児の言葉の意味についてビデオ分析後に気づくことも多く状況に応じた応答が十分ではなかった。後期では、M児が遊びやコミュニケーションを開始できるように見守ることを意識しながら療育を行った。後期も「雪ってどういう意味」と同じ質問を繰り返したが、その度に「雪を見たことがありますか」「雪は冷たかったですか」「雪の色を何色ですか」等、M児が考えながら答えを見つけることができるように応答した。

前期と後期のかかわり方の変化として、Non-Verbal行動としては、子どもがしていることをまねてコミュニケーションの糸口をつかむ項目において改善が見られた。また、Verbal行動としては、子どもがもっと話したくなるような言葉掛けをする、子どもに大人の意図がよくわかるように工夫している、子どものことばの学習に役立つような言葉掛けをしているという3項目に改善が認められた。前期・後期とも、子どもに合わせた遊びを楽しく展開することができていた。このように、毎回の療育を重ねるごとにM児との心理的距離は縮まり、また、Thの感度も改善されたこと等がM児の対人認知の発達やコミュニケーション意欲の向上に影響を与えたと考えられる。

引用文献

- 別府哲・奥住秀之・小淵隆司（2005） 自閉症スペクトラムの発達と理解、全国障害者問題研究会
- 竹田契一・里見恵子（1994） インリアル・アプローチ、日本文化科学社
- 上野一彦・他（2006） LD・ADHD等関連用語集、日本文化科学社